

じん い せき
おしめ尽遺跡

(C区)

令和3年8月

宇都宮市教育委員会

序

おしめ尽遺跡は、宇都宮市江曾島4丁目に所在する遺跡です。周辺には雷電山遺跡や関道遺跡など、古墳時代から平安時代にかけての古墳や集落跡が数多くあり、おしめ尽遺跡もそのうちのひとつとして古くから知られていました。

今回、シーズンホーム都市開発株式会社による宅地造成に伴い、影響を受けることとなった本遺跡の取り扱いにつきまして、事業者をはじめ、関係機関と協議の上、遺構の保存が行えない部分について、記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。調査の結果、古墳時代の集落跡の一部が確認され、江曾島地区の古代の歴史を知る上で、貴重な資料を得ることができました。

本報告書は、今回の発掘調査で得られたこれらの成果をまとめたものであり、多くの方々にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで、多大なるご理解とご協力をいただきました関係各位、関係機関に対しまして、厚く御礼申し上げます。

令和3年8月

宇都宮市教育委員会

教育長 小堀茂雄

例 言





1. 本書は、栃木県宇都宮市江曾島4丁目122地内に所在する「おしめ尽遺跡」の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、シーズンホーム都市開発株式会社による宅地造成に伴うもので、シーズンホーム都市開発株式会社より委託を受けた株式会社日本窯業史研究所が宇都宮市教育委員会の指導の下に実施した。
3. 野外調査は、令和2年10月5日から同年10月17日まで行い、整理・報告書作成作業は令和3年8月31日まで実施した。
4. 本書の執筆は「第1章 第1節」を宇都宮市教育委員会近藤 真、他は新井が執筆した。編集は新井が行い、菅間智子の協力を得た。

5. 調査組織

調査指導・宇都宮市教育委員会	調査主体者・株式会社日本窯業史研究所
小堀 茂雄 教育長	菅間 裕二 代表取締役
青木 容子 教育次長	新井 潔 調査担当者（日本考古学協会々員）
山口 達雄 文化課長	
今平 利幸 文化課主幹	
前原 義之 文化課文化財保護グループ係長	
近藤 真 文化課文化財保護グループ	

6. 調査記録及び出土遺物は、宇都宮市教育委員会が保管する。
7. 野外調査及び整理・報告書作成作業において、下記の諸機関よりご助力とご指導を賜った。ご芳名を記して謝意を表する次第である。
栃木県教育委員会事務局文化財課、シーズンホーム都市開発株式会社（敬称略、順不同）
8. 調査参加者
石川義夫、入江晴江、入江通子、渡辺重夫（敬称略、順不同）

凡 例

1. 本遺跡名の略号は、U（宇都宮）E（江曾島）O（おしめ尽）=UEOとし、各遺構の略号はSI（竪穴建物跡）、SK（土坑）、P（住居内小穴）を示す。土層注記のLR=ローム粒、LB=ロームブロック、NR=粘土粒、SR=凝土粒を示す。
2. 第2図は国土地理院発行の25,000分の1地形図『宇都宮東部』『宇都宮西部』を部分複製し加筆した。
3. 挿図は調査区全体図が縮尺100分の1、他の遺構実測図の縮尺は60分の1を基本とし、カマドは縮尺30分の1、遺物実測図は3分の1を基本とする。
4. 遺構図面上の北の方位は、座標北を示す。土層図・断面図の水準線上の数値は、海拔標高を示す。
5. 挿図の遺物番号は本文及び写真図版の番号と合致する。写真図版は○-□の前が挿図番号、後ろが遺物番号である。
6. 遺構図で使用したスクリーントーンは以下の通りである。
 カマド構築材  焼土  粘土籠囲  攪乱
7. 土層観察と土器類の色調判定は、『新版標準土色帖30版』（小山正忠・竹原秀雄編・著 農林水産省農林水産技術会議事務局 監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修 2008）による。

目 次

序	
例言・凡例・目次	
第1章 調査に至る経緯と経過	7
第1節 調査に至る経緯	7
第2節 調査の経過と概要	7
第2章 遺跡の位置と環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の方法と基本土層	11
第1節 調査の方法	11
第2節 基本土層	11
第4章 遺構と遺物	12
第1節 堅穴建物跡	12
第2節 土坑	18
第5章 総括	19
第1節 土地利用の変遷	19
第2節 遺構・遺物について	20
写真図版	
報告書抄録・奥付	

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表

第3表 周堤帯を持つ竪穴建物跡

第2表 SI-1 出土遺物観察表

挿 図 目 次

第1図 確認調査図

第7図 SI-1 掘方・カマド遺構平・断面図

第2図 遺跡の位置と周辺遺跡

第8図 SI-1 出土遺物(1)

第3図 基本土層図

第9図 SI-1 出土遺物(2)

第4図 グリット設定図(1:200)

第10図 SK-1・SK-2 遺構平・断面図

第5図 調査区全体図(1:100)

第11図 おしめ尽遺跡A~C区遺構概念図

第6図 SI-1・P-1・P-6・南壁粘土遺構平・
断面図

図 版 目 次

図版1 A. 調査区全景(西から) B. 調査前全景(東から) C. 遺構確認状況(東から) D. SI-1
土層A-A'(南から) E. SI-1 土層B-B'(東から)

図版2 A. SI-1 遺物出土状況(西から) B. SI-1 遺物5・18(南から) C. SI-1 カマド土層F-F'
(西から) D. SI-1 カマド完掘(西から) E. SI-1 貯蔵穴(P-1)土層(南から) F. SI-1
貯蔵穴(P-1)遺物出土状況(西から) G. SI-1 貯蔵穴(P-6)土層(西から) H. SI-1
貯蔵穴(P-6)遺物出土状況(南から)

図版3 A. SI-1 南壁灰白色粘土(北から) B. SI-1 完掘(西から) C. SI-1 掘方完掘(西から)
D. SK-1 土層(南から) E. SK-1 完掘(南から) F. SK-2 土層(南から) G. SK-2 完掘
(南から) H. 基本土層(東から)

図版4 SI-1 出土遺物(1)

図版5 SI-1 出土遺物(2)

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯（第1図）

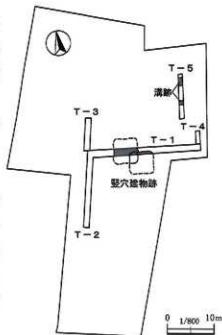
今回の調査地区については、令和2年2月28日付けでシーズンホーム都市開発株式会社より、江曾島4丁目120-4、121-1、-4、122、123-5、-9、124-6のおしめ尽遺跡（県番号3227）で予定されている宅地造成工事に伴い、文化財保護法第93条の届出が提出された。

3月4日付けで宇都宮市教育委員会文化課から栃木県教育委員会文化財課（以下県文化財課）へ進達し、これに対し県文化財課より確認調査が必要である旨の指示が3月13日付けであったため、事業者と協議し、確認調査を実施することとなった。

確認調査は、6月24日に実施した。調査の方法は、宅地造成工事が予定されている場所に5本の試掘溝を設定し、遺構の有無を確認した。調査の結果、2軒の竪穴建物跡と思われる遺構が確認された。

この調査結果を7月2日付けで事業者側に通知し協議した結果、道路予定地の変更は難しいとの結論に至ったため、開発区域内の道路予定地約72㎡について記録保存の発掘調査を実施することとなった。発掘調査の費用負担に関しては、シーズンホーム都市開発株式会社が負担することとなり、宇都宮市教育委員会教育長小堀茂雄と埋蔵文化財発掘調査に関する覚書の交換を行った。

発掘調査は、株式会社日本竊業史研究所が調査主体となり、現地における発掘調査及び発掘調査報告書の作成を担当することとなった。



第1図 確認調査図

第2節 調査の経過と概要（第4図）

令和2年10月2日に調査器材の準備や現場看板の作成、同月3日には現場近くの街区基準点からの水準点の移動と調査区の設定、調査区の調査前写真の撮影を行う。同月5日、重機による表土除去を行い午前中で終了。器材の搬入と安全対策を施工後、遺構確認作業を行う。遺構確認作業により竪穴建物跡1軒と土坑2基が認められ、これ以外は耕作による東西・南北に延びる多数の擾乱が占めていた。確認された遺構の調査と記録を継続して行い、10月14日に西側より調査区全景写真の撮影を行う。同日午後には、市教育委員会文化課と事業主に対し調査成果の説明を行い、終了確認を受ける。その後、補足調査・記録を行い、同月17日に現場の撤収を行いすべての野外作業を終了した。

今次調査では、古墳時代中期の竪穴建物跡1軒、近世以降の土坑2基を確認した。道路予定地部分という調査区の制約から、竪穴建物跡全体を調査することはできなかった。出土物は古墳時代の土師器、須恵器と縄文時代中期以降の凹石などが出土した。

整理・報告書作成作業は、現地調査と併行して遺物の洗浄・注記作業を行い、現地調査終了後から令和3年8月31日まで実施した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第2図）

おしめ尽遺跡は、栃木県宇都宮市江曾島町及び江曾島4丁目地内に所在する。栃木県は関東平野の北部に位置し、北側は福島県、西側は群馬県、東と南側は茨城県と接する。西・北側の急峻な山地と東側の山地に囲まれ、北東の福島県白河付近から南側に平地が延びる。

宇都宮市は栃木県のほぼ中央部に位置し、西は鹿沼市・壬生町、北が日光市・塩谷町・さくら市、東は高根沢町・芳賀町、南は上三川町・下野市・真岡市と接する。市の東側を利根川の支流で最も長い鬼怒川が南流し、中央を鬼怒川支流最大の田川、西寄りには利根川水系思川の支流姿川が南流する。姿川流域の姿川低地と田川流域の田川低地に挟まれた宇都宮台地は両河川の支流により開析され、小支谷が樹枝状にひろがっている。本遺跡はこの台地の一角で西は姿川支流の新川、東は水路（新川4-1号幹線）を境とし、これらの合流地点を南端とする台地の南側に位置する。本遺跡から田川まで約2km、姿川まで約3km、新川まで約200mである。

交通的には、JR東日本宇都宮線宇都宮駅の南西方約5kmに位置し、東武宇都宮線江曾島駅の南東方約1.2kmに所在する。また、国道4号線が東方約0.9kmを南北に、西方約1.5kmを県道宇都宮栃木線が南北に通る。

第2節 歴史的環境（第2図、第1表）

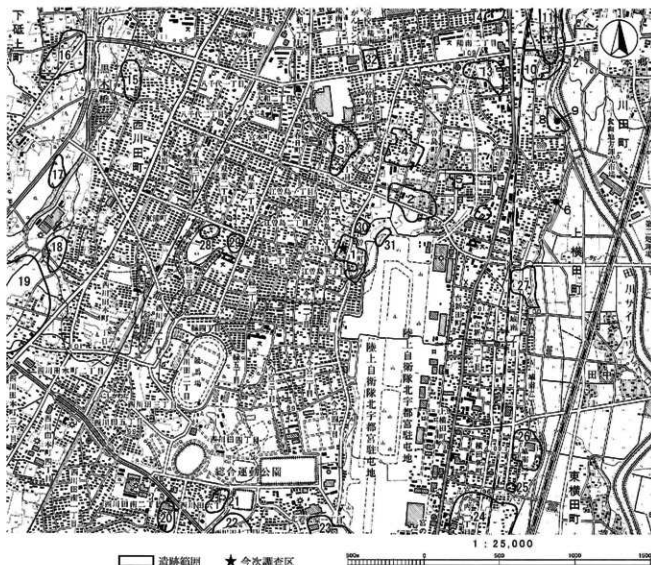
周辺に所在する遺跡を第2図、第1表に示した。本遺跡から半径約1.5kmの圏内に約30ヶ所の遺跡が所在する。旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代の遺跡は10ヶ所程が知られ、本村遺跡（12）からは落とし穴（早期か）が確認され、早期や中期の土器が出土している。他に小野測器北遺跡（20）も該期の遺跡であるが、本遺跡を含め10ヶ所の遺跡の規模は小さく、北西方約5kmの御城田遺跡のような大きな集落ではなかったと考えられる。

弥生時代の遺跡は市内全体でも30ヶ所程度と少なく、前期の遺跡は確認されていない。中・後期には水田耕作のために田川・姿川とその支流に水田を開き、近くの台地上に集落を営んだと考えられる。中期では宇都宮北部に野沢遺跡がみられ、再葬墓であったと考えられている。また、塚山古墳群（22）の塚山西古墳から宇都宮大学考古学研究会の調査で中期末の土器が出土している。後期は標式遺跡の二軒厩遺跡が南方約4kmにみられ、平成24・25年の調査で、縄文から古墳時代にわたる遺構を確認している。周辺では本村遺跡（12）の市道改良や老人福祉施設の建設に伴う調査で、後期の堅穴建物跡が20軒程調査され、十王台式の土器等が出土した。

古墳及び古墳時代の集落跡は18ヶ所知られる。前期では南方約2.7kmに溜西南遺跡がみられ、前期から後期にまたがって集落が営まれていた。中期では塚山古墳群（22）が造られ、県指定史跡の塚山古墳（全長98mの前方後円墳）を主墳とし8基の存在が知られる。塚山古墳は田川左岸の東谷塚古墳の後継的首長墓と見られている。また、北東方約2kmの本村古墳群（11）では中期から後期の古墳が5基確認されている。

該期の集落跡ではおしめ尽遺跡（1）、雷電山遺跡（3）、北若松原遺跡（23）などが知られ、おしめ尽遺跡は三次調査まで行われており、中期を中心とした堅穴建物跡が確認されている。

後期の古墳は主に横穴式石室を主体部に持つもので、周辺には針ヶ谷新田古墳群があり、集落跡は本遺跡の他、関道遺跡（2）や宮の内遺跡（24）がみられる。



第2図 遺跡の位置と周辺遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	系遺跡番号	時代					番号	遺跡名	系遺跡番号	時代					
			縄文	弥生	古墳	平安	中世				近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	平安
1	おしめ尻遺跡	3227	○	○	○	○	○	17	下砥上山ノ神遺跡	3208		○				
2	園道遺跡	3285	○	○	○	○	○	18	北之原遺跡	3209				○		
3	雷電山遺跡	2228	○	○	○	○	○	19	西の内遺跡	3210	○			○	○	
4	並松遺跡	3284			○	○		20	小野御器北遺跡	3254	○					
5	江曾島北原遺跡	3283			○	○		21	塚山北遺跡	3220			○			
6	大山祇神社古墳	3287			○	○		22	塚山古墳群	3254		○	○			
7	江曾島北原南遺跡	3286	○			○		23	北岩松原遺跡	3226			○	○		
8	台内手遺跡	3282			○	○		24	宮の内遺跡	3291			○	○	○	
9	台内手古墳群	3278			○	○		25	城南3丁目南遺跡	3290						
10	西原塚遺跡	3281	○	○	○	○		26	城南3丁目遺跡	3289	○		○	○	○	
11	本村古墳群	3272			○	○		27	大崩林遺跡	3288			○	○		
12	本村遺跡	3275	○	○	○	○		28	自動車教習所北遺跡	3229	○					
13	河原ヶ沼遺跡	3280			○			29	緑ヶ丘小北遺跡	3230				○		
14	福南1丁目遺跡	3274				○	○	30	江曾島桑原遺跡	8808				○		
15	ヤヅカ遺跡	3207						31	おしめ尻東遺跡	8809						
16	並塚遺跡	3199			○	○		32	ガンセンター東遺跡	3231				○		

当地は、律令制下においては下野国河内郡に属していたと推察され、当郡の郡家は本遺跡の南方約6km、本市と上三川町とにまたがって所在する国指定史跡上神主・茂原官衙遺跡に比定されている。また、その西隣りは評家と推定される西下谷田遺跡があり、上三川町多功遺跡も後継の郡家と推定されている。本遺跡の周辺では奈良・平安時代の遺跡が22ヶ所と全体の3分の2を占め、該期の遺跡が増加している。おしめ尽遺跡でもA区で1軒、B区では2軒の堅穴建物跡が確認されている。

中世遺跡はあまり多くはないが、8ヶ所程知られる。前述の雷電山遺跡は宇都宮氏の家臣江曾島氏の居城と伝えられ、江曾島城跡と呼ばれている。また、前記の本村遺跡では市道改良部分の調査で該期の集落跡が確認された。奥大道沿いの集落跡と考えられ、市内においても貴重な存在である。さらに、城南3丁目遺跡(26)でも堀跡や方形堅穴、掘立柱建物跡などが高い密度で確認されており、ここも奥大道との関係が想定されている。また、宮の内遺跡(24)や西の内遺跡(19)でも中世の遺構や遺物が確認されている。本遺跡の過去調査区(A区)では、溝跡から青磁片などが出土し、該期の土地利用が知られる。

参考・引用文献

1. 久保哲三 1979 『権現山北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第5集
2. 栃木県教育委員会 1997 『土地分類調査図 宇都宮』
3. 宇都宮市史編さん委員会 1979 『宇都宮市史』第1巻 宇都宮市
4. 藤田典夫・塚本師也・榎木茂雄・竹澤 謙・津野 仁 1987 『稻荷塚・大野原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第84集
栃木県教育委員会
5. 赤石博 亮 1988 『開道遺跡』宇都宮市文化財調査報告書第25集
6. 今平利幸 1994 『雷電山遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第34集
7. 今平利幸 1996 『城南3丁目遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第39集
8. 名耳昌昭・武藤健二・五十嵐利勝 1996 「雀宮周辺の分布調査6」『下野考古学』24 下野考古学会
9. 栃木県教育委員会 1997 『栃木県埋蔵文化財地図』
10. 宇都宮市教育委員会 1997 『宇都宮市埋蔵文化財地図』
11. 宇都宮大学考古学研究会 2003 『塚山西古墳 塚山南古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第48集
12. 富川 努 2004 『本村遺跡(弥生・古墳編)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第49集
13. 内山敏行 2005 『東谷・中島地区遺跡群5 立野遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第290集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生誕学習文化財団
14. 三輪季幸・井 博幸・三比利一他 2007 『本村古墳群・本村遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第58集
15. 桑里制・古代都市研究会編 2009 『日本古代の都府遺跡』(株)雄山閣
16. 石川和弘・今平利幸 2013 『西の内遺跡』宇都宮市文化財調査報告書第81集
17. 宇都宮市立図書館 2015 『陽光地域データブック』
18. 嵯地良夫・今平利幸 2016 『二軒屋遺跡・芋内遺跡』宇都宮市文化財調査報告書第95集
19. 宇都宮市教育委員会 2017 『宇都宮市遺跡分布地図』
20. 若島直人・近藤 真・三輪季幸 2017 『雷西南遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第98集
21. 柴木 誠・渡谷麻友子・近藤 真 2019 『北若松原遺跡・若松原南遺跡』宇都宮市文化財調査報告書第105集
22. 宇都宮市教育委員会 2019 『宇都宮市文化財年報第34号』

第3章 調査の方法と基本土層

第1節 調査の方法 (第4図)

調査は小型重機を使用し、厚さ40cm程の表土(耕作土)を半日で除去した後、人力により遺構確認作業を行った。

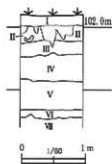
確認した遺構は、竪穴建物跡は十文字ベルト、土坑・小穴は半截による掘り下げ後、土層の観察・記録を行った。その後、セクションベルトを除去して、完掘写真撮影・実測を行った。さらに、竪穴建物跡は床面を除去して掘方を確認し、再度写真撮影・実測を行った。この間、遺構の帰属時期を示すと思われる遺物は出土位置の記録、出土状態の写真撮影を行って取り上げた。

調査の記録に際しては、公共座標(世界測地系)を使用した10m方眼のグリッドを設定した。南西隅を基点(A1)とし、その座標値はX=58,080,000、Y=3,170,000を示す。X軸をアラビア数字、Y軸をアルファベットで示した(第4図)。平面図は縮尺20分の1で全面を網羅した。計測にはレイアウトナビゲーターを使用し、人手で図化した。土層図、断面図も縮尺20分の1を基本とするが、カマドは縮尺10分の1で作図した。

写真撮影は、35mm判のデジタルカメラを使用した。なお、撮影に際しては、カメラ三脚及び大型脚立にカメラの雲台を固定し行った。

第2節 基本土層 (第3図)

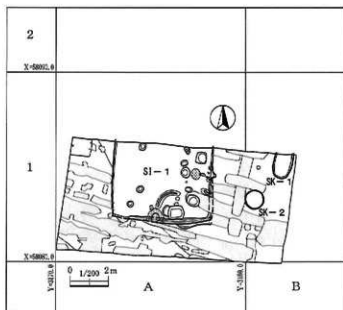
調査対象地の現況はほぼ平坦な畑地となっているが、地山面は北西から南東に向かって緩やかに傾斜していた。畑地として長く利用されていたことから、厚さ40cm程の耕作土(I層)、直下が遺構確認面のローム層(II層)であった。基本土層として調査区北西部における柱状土層図を第3図に示した。



基本土層

- I. 黒褐色土 (10YR3/1) 細砂りややあり、粘土なし、L.R
(1~10mm)20%、白色土(1~10mm)5%含む、礫質土
- II. 黄褐色土 (10YR7/6) 細砂り・粘性あり、黄色土(1~10mm)3%含む
- III. 黄褐色土 (10YR7/6) 細砂り・粘性あり、黄色・白色
R(1~10mm)各5%含む
- IV. 黄褐色土 (10YR7/6) 細砂り・粘性あり、黄色・白色
R(1~10mm)各5%含む
- V. 黄褐色土 (10YR7/6) 細砂り・粘性あり、黄色・白色
R(1~10mm)各15%含む
- VI. 濃い黄褐色土 (10YR5/3) 細砂り・粘土あり、遺埋バ
ス石(1~10mm)30%含む、高層石層砂層
- VII. 黄褐色土 (10YR7/6) 細砂りややあり、粘土なし、崖
面バスメス(1~10mm)5%以上含む、混埋礫石層

第3図 基本土層図



第4図 グリッド設定図(1:200)

第4章 遺構と遺物

今次調査で確認した遺構は、古墳時代中期の竪穴建物跡1軒、近世以降の土坑2基である。調査区内には東西、南北に延びる耕作による攪乱が多くみられ、一部は遺構に達していた(第5図)。遺物は古墳時代の土師器が主体で、竪穴建物跡からは同期の須恵器細片や縄文時代の凹石(混入品)がみられた。

第1節 竪穴建物跡

SI-1 (第6~9図、第2表、図版1~5)

遺構 A1グリットに所在し、北側が調査区外へ延びる。東約3mにSK-1、東約2mにSK-2が隣接する。

平面形・規模は、東西長5.2m、現存南北長4mで、本来は一辺が5.2m程の方形と思われる。東壁の中央と考えられるところにカマドが設けられ、主軸方位はN-100°-Eを示す。

壁は現存高さ35~40cmでほぼ直立する。壁下には南壁及び東壁の一部に幅20~40cm、深さ8~10cmの壁溝が設けられている。

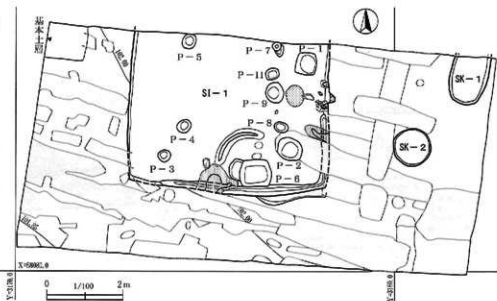
床面は主柱穴より外側は粗掘りの後ローム主体の土で整地され、全体に固く締まっていた。

ピットはP-4・P-5・P-7・P-8が主柱穴、P-1・P-6が貯蔵穴と判断される。主柱穴は径が25~40cmと竪穴の規模に比べて小振りであったが、深さが72~78cmでしっかり掘えられていた。また、P-4・P-7には柱掘方がみられ、作り替えが考えられる。貯蔵穴はP-1が60×55cm、深さ40cm、P-6が85×70cm、深さ25cmでそれぞれ遺物が出土している。また床面南側にP-6を半円形に囲むようにして長さ約150cm、幅20~30cm、高さ約5cm程の周堤帯が設けられ、その南側には南壁に接して東西105cm、南北70cmの台形状の灰白色粘土塊がみられた。このような粘土は東壁際でも確認されているが、こちらはカマド用材の一部であった可能性が高い。

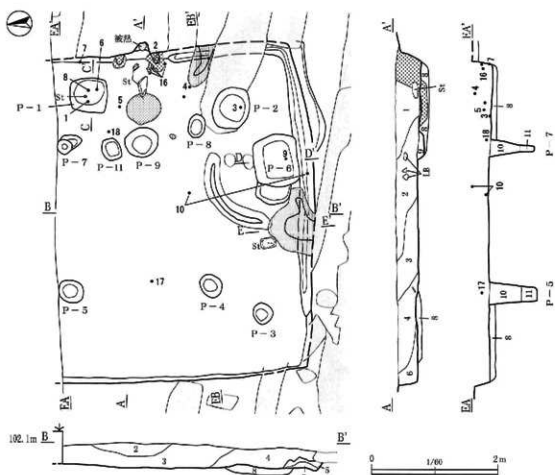
カマドは東壁の中央と推定される壁を幅40cm、奥行15cm程を半円形に掘り込み、白色粘土で築かれていた。遺存状態は悪いが、焚口部の補強材と考えられる石材が2個認められ、壁の内側約50cmに火床の痕跡がみられた。

覆土は5層に分層され、自然埋没と考えられる。

遺物 床面や貯蔵穴・ピット覆土中よりほぼ完形の土師器坏(2~5・7・9・10)や壺(17-18)、小形埴(1)の他、坏(6・8)・高坏(11)・小形壺(12-13)・壺(14~16)なども出土したが、いずれも半完形や小片が多い。

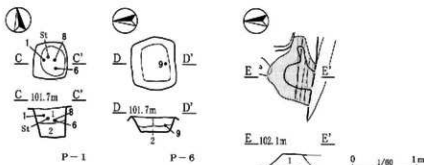


第5図 調査区全体図(1:100)



SI-1

1. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 埴土り・粘性ややあり、LR(1~10mm)20%、LR(20~30mm)・灰白色NR(1~10mm)5%含む
2. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 埴土り・粘性ややあり、LR(1~10mm)30%、LR(20~30mm)10%、灰白色NR(1~10mm)3%含む
3. にがい黄褐色土 (10YR5/3) 埴まり・粘性ややあり、LR(1~10mm)30%、LR(20~30mm)10%含む
4. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 埴まり・粘性ややあり、LR(1~10mm)30%、LR(20~30mm)5%含む
5. 灰褐色土 (10YR3/1) 埴まり・粘性ややあり、LR(20~30mm)2%、LR・灰白色NR(1~10mm)各5%含む
6. 灰黄褐色土 (10YR3/2) 埴土り・粘性ややあり、LR(1~10mm)・LR(20~30mm)5%含む
7. 灰白色土 (10YR8/2) 灰白色NR(1~10mm)が50%以上占める
8. にがい黄褐色土 (10YR6/4) 埴まり・粘性あり、NR(1~10mm)15%含む
9. にがい黄褐色土 (10YR6/3) 埴まり・粘性あり、LR(1~10mm)20%、LR(20~30mm)30%含む
10. 黄褐色土 (10YR3/2) 埴まり・粘性ややあり、LR(1~10mm)5%、LR(20~30mm)3%含む
11. 明黄褐色土 (10YR7/6) 埴まり・粘性あり、LR(20~30mm)50%含む
12. 黄黄褐色土 (10YR6/6) 埴まりなし、粘性あり、NR(1~10mm)30%含む



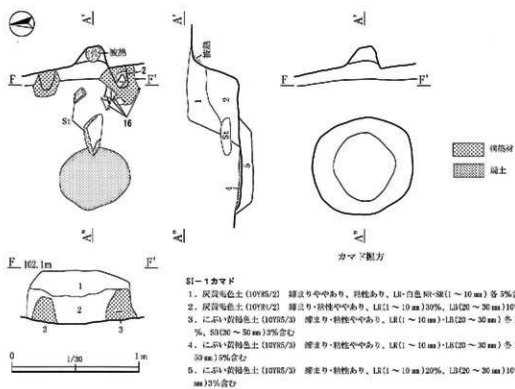
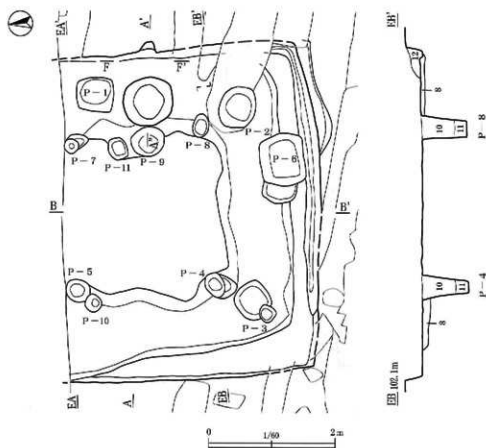
P-1・P-6

1. 灰褐色土 (10YR3/1) 埴土り・粘性ややあり、LR(1~10mm)3%、LR(20~30mm)3%含む
2. にがい黄褐色土 (10YR5/2) 埴土り・粘性ややあり、LR(1~10mm)10%、LR(20~30mm)3%含む

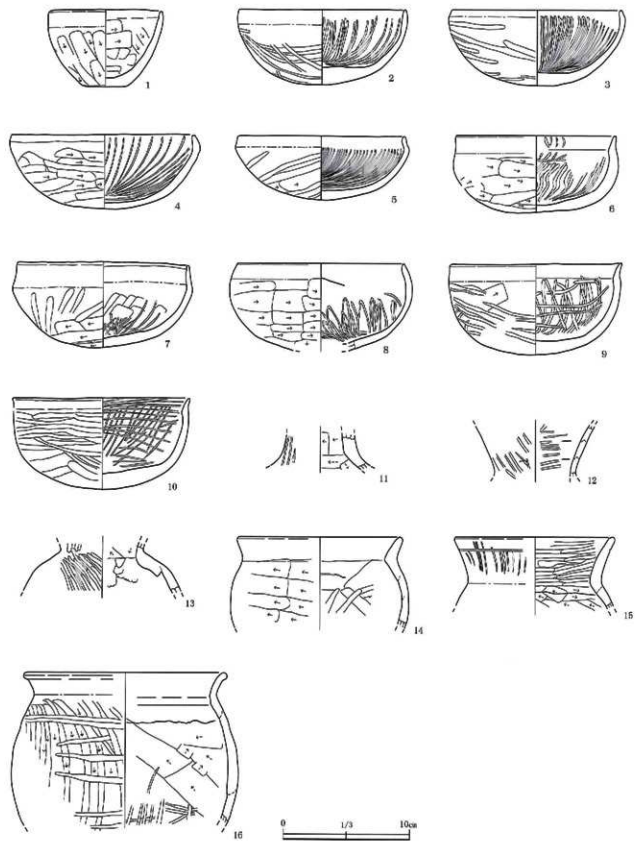
兩壁粘土

1. 灰白色土 (10YR8/1) 埴まりやあり、粘性あり、灰白色NR(1~10mm)が50%以上占める

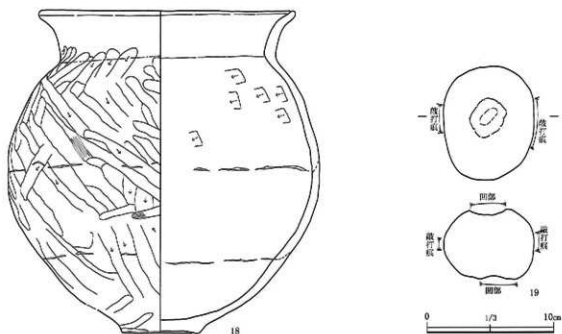
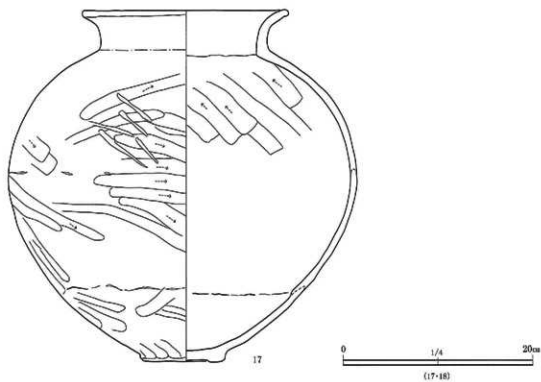
第6図 SI-1・P-1・P-6・兩壁粘土遺構平・断面図



第7図 SI-1掘方・カマド遺構平・断面図



第8图 S1-1出土遺物(1)



第9圖 SI-1出土遺物(2)

第2表 SI-1出土土物観察表

単位 cm () 推定値 [] 存在性

番号	種別	形状	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手造の特徴	出土位置	備考
1	土師胎	小形埴	9.2	6.2	3.4	石英・長石・ チャート・角 閃石	内：淡黄褐色(10YR8/4)、外：淡 黄褐色(10YR8/4)、褐色(10YR6/1)	普通	口辺部内面横ナデ仕上げ、体部 外縁部へラナゲ、内面斜め へラナゲ	P-1 履土1区	70%
2	土師胎	埴	13.3	6.0	—	石英・長石	内・外：褐色(7.5YR7/6)	普通	口辺部外面と内面全体横ナデ 仕上げ後内面放射状ミガキ、体 部外面横へラナゲ	コマド 履土2区	70% 外面に呂鉄あり
3	土師胎	埴	(13.6)	6.0	—	石英・長石・ 角閃石	内：褐色(5YR8/4)、外：黄褐色 (5YR8/4)、褐色(5YR7/6)	普通	口辺部外面と内面全体横ナデ 仕上げ後内面放射状ミガキ、体 部外面横へラナゲ	履土7区	70% 体部外面二次被熱 で器面荒れる
4	土師胎	埴	14.4	5.9	—	石英・長石	内：黒褐色(10YR3/1)、明黄褐色 (10YR6/4)、外：褐色(10YR4/1)、明黄褐色(10YR6/0)	普通	口辺部外面と内面全体横ナデ 仕上げ後内面放射状ミガキ、体 部外面横へラナゲ	履土8区	90% 二次被熱で器面荒 れる
5	土師胎	埴	13.5	5.1	—	石英・長石・ 角閃石	内：暗黄褐色(10YR8/6)、明褐色 (10YR3/1)、外：褐色(7.5 YR7/6)、暗黄褐色(10YR8/6)	普通	口辺部外面と内面全体横ナデ 仕上げ後内面放射状ミガキ、体 部外面横へラナゲ	履土2区	90% 体部外面二次被熱 で器面荒れる
6	土師胎	埴	(12.8)	6.1	—	石英・長石	内：暗黄褐色(7.5YR7/4)、褐色 (7.5YR8/6)、外：褐色(10YR 4/1)、褐色(7.5YR8/6)	普通	口辺部外面と内面全体横ナデ 仕上げ後内面放射状ミガキ、体 部外面横へラナゲ	P-1-3 履土1区	90%
7	土師胎	埴	13.5	6.5	—	石英・長石	内：褐色(7.5YR8/6)、明褐色 (10YR3/1)、外：褐色(7.5YR 8/6)	普通	口辺部外面と内面全体横ナデ 仕上げ後内面放射状ミガキ、体 部外面横へラナゲ	履土1区	90% 器体が歪んでいる
8	土師胎	埴	(13.4)	(7.0)	—	石英・長石・ 褐色鉄	内：褐色(7.5YR7/6)、にぶい黄 褐色(10YR9/3)、外：褐色 (7.5YR7/6)	普通	口辺部外面と内面全体横ナデ 仕上げ後内面放射状ミガキ、体 部外面横へラナゲ	P-1-2 履土1区	40% 内面の一部に付着 土塊残る
9	土師胎	埴	13.8	7.2	—	石英・長石・ チャート	内：褐色(5YR8/6)、外：褐色 (5YR8/8)、黄褐色(10YR 4/1)	普通	口辺部外面と内面全体横ナデ 仕上げ後内面放射状ミガキ、体 部外面横へラナゲ	P-9-1	90% 二次被熱で器面荒 れる
10	土師胎	埴	(14.1)	7.3	—	石英・長石・ チャート・角 閃石	内・外：褐色(5YR8/6)、外：淡 黄褐色(7.5YR8/4)	普通	口辺部外面と内面全体横ナ ゲミガキ、内面放射状ミガ キ、器部外面へラナゲ	履土10 履土2区	90% 二次被熱で器面荒 れる
11	土師胎	高埴	—	(3.0)	—	石英・長石	内：褐色(5YR8/6)、外：黄褐色 (7.5YR7/8)	普通	脚部外面横ナゲ後縦方向ミガ キ、内面正上へラナゲ、内下 部へラナゲ	履土2区	小片
12	土師胎	小形埴	—	(4.1)	—	石英・長石・ 角閃石	内・外：褐色(7.5YR7/6)	普通	口辺部外面横ナゲ後縦方向ミ ガキ、内面横ナゲ後横へラミ ガキ	履土2区	小片 二次被熱で器面荒 れる
13	土師胎	小形埴	—	(3.7)	—	石英・長石	内：にぶい褐色(7.5YR7/4)、 外：明黄褐色(5YR8/6)	普通	脚部外面へラナゲ後斜めへラ ミガキ、内面横ナゲ仕上げで、 深部接合板明部、内外面赤彩 (鉄化粧)	履土3区	小片
14	土師胎	埴	(13.0)	(7.2)	—	石英・長石・ 角閃石	内：褐色(7.5YR7/6)、にぶい黄 褐色(7.5YR8/6)、外：淡黄褐色 (10YR5/2)、褐色(7.5YR7/6)	普通	口辺部外面横ナゲ、外部外面 横へラナゲ、内面横ナゲ後 縦方向ミガキ	履土2区 履土6区	10%
15	土師胎	埴	(12.0)	(5.7)	—	石英・長石	内：褐色(10YR3/1)、外：褐色 (5YR8/6)、黄褐色(5YR8/2)	普通	口辺部内外面横ナゲ後外縁 方向ミガキ、内面横方向ミガ キ、外部外面横ナゲ仕上げ、 内面横ナゲ仕上げ	履土2区	10% 二次被熱で器面荒 れる
16	土師胎	埴	(10.3)	(12.3)	—	石英・長石・ 角閃石	内・外：淡黄褐色(7.5YR8/4)	普通	口辺部外面横ナゲ仕上げ、 内面横ナゲ後ミガキ、外部外 面横へラナゲ後ミガキ	コマド1 履土4区	90% 外面に黒炭あり
17	土師胎	埴	21.8	37.0	9.0	石英・長石・ 角閃石	内：にぶい黄褐色(10YR7/4)、 外：黒色(10YR2/1)、にぶい黄 褐色(10YR7/4)	普通	口辺部内外面横ナゲ仕上げ、 体・底内面横ナゲ仕上げ、体 外面へラナゲ(へラミ目こす)、 底面外面横へラナゲ	履土1-3 履土1区	90% 体部外面横ナゲ付着
18	土師胎	埴	27.2	34.0	9.0	石英・長石・ 角閃石	内：にぶい褐色(7.5YR7/4)、黄 褐色(10YR3/1)、外：黄褐色 (10YR4/1)、黒色(10YR2/1)、に ぶい黄褐色(5YR8/4)	普通	口辺部内外面横ナゲ仕上げ、 体・底内面横ナゲ仕上げ、体 外面へラナゲ(へラミ目こす)、 底面外面横へラナゲ	履土1区	90% 内外面に黒付着、 二次被熱で器面荒 れる
番号	種別	形状	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石質	手造の特徴等	出土位置	備考	
19	石器	磨石	9.0	7.2	5.5	454	安山岩	長表面に凹部、両側面の縦溝	履土4区	未入品	

第2節 土坑

調査区内において計2基確認したが、遺構に伴う遺物の出土もなく明確な時期・性格は判然としないが、覆土の状態などから近世・近代と推定される。

SK-1 (第10図、図版3)

遺構 調査区東端のB1グリットに所在し、北側は調査区外へと続く。西約3mにSI-1、南西約1.2mにSK-2が隣接する。

開口部は東西長約100cm、現存南北長約140cmで、本来は長径190cm程の楕円形と推定される。深さ10cmで壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

覆土は単層で、自然堆積と考えられる。

土師器の細片が出土するも、遺構に伴うものでないと思われる。

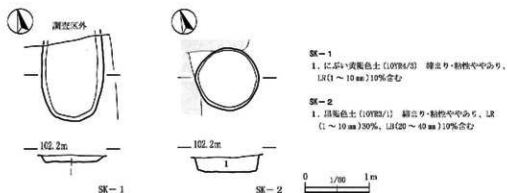
SK-2 (第10図、図版3)

遺構 調査区東端のB1グリットに所在する。西約2mにSI-1、北約1.2mにSK-1が隣接する。

開口部は径約80cmの円形。深さ35cmで壁は直立し、底面はほぼ平坦である。

覆土は、単層で、自然埋没と考えられる。

土師器の細片が出土するも、遺構に伴うものでないと思われる。



第10図 SK-1・SK-2遺構平・断面図

第5章 総括

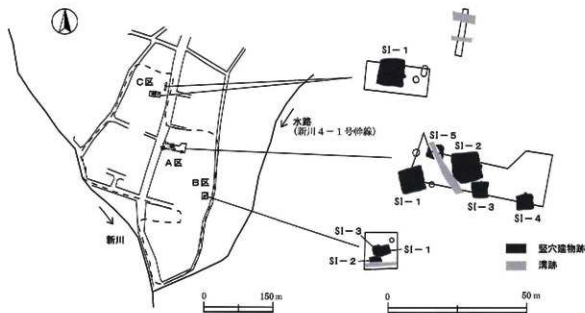
第1節 土地利用の変遷

今回のおしめ尽遺跡は調査面積100㎡以下と狭く、これまで3回調査されてきたその合計面積は約370㎡で、おしめ尽遺跡全体約28,000㎡の2%に満たないが、これまでの成果を基におしめ尽遺跡の土地利用の変遷を概観したい。

縄文時代は、C区で縄文時代の遺物（凹石）がSI-1に混入していたが、表土その他から縄文時代の遺物が確認されていないことから小規模な集団が本遺跡かその近辺で生活していたと考えられる。遺物から縄文時代中期以降と考えられる。本遺跡近くで2,000㎡以上の広域に調査された雷電山遺跡では早期～中期の数十点の遺物が出土し、その時期に近い土坑2基のみが確認されている。

弥生時代は、本遺跡内において今のところ遺物・遺構は確認されていない。

古墳時代は、1～3次調査によって中期から後期にかけての竪穴建物跡が確認されている。各調査区で確認された竪穴建物跡は、A区中期3軒、B区中期1軒、後期1軒、C区中期1軒が確認され、中期の竪穴建物跡が確認される割合が高い。このことは周辺の雷電山遺跡でも11軒中7軒と同じ傾向を示している。中期の竪穴建物跡の規模はA区SI-1（一辺推定6m以上）、A区SI-2（一辺6.4m）、C区SI-1（一辺5.2m）と、これより小ぶりのA区SI-5（一辺3.5m）とB区SI-2（一辺3.3m）に大別される。この中でカマドを確認できたのは、A区SI-2とC区SI-1で、共に東壁を浅く掘り込んだ初期的なカマドである。特筆される出土遺物としては、A区SI-1から石製模造品（勾玉）が出土している。近隣では雷電山遺跡のSI-2から同種の石製模造品（勾玉）が出土している。



第11図 おしめ尽遺跡A～C区遺構概念図

また、A区SI-1から古式須恵器（器台）が出土しており、雷電山遺跡や関道遺跡などの近隣遺跡からも該期の須恵器が出土しており注目される。

奈良・平安時代の遺構や遺物はおしめ尽遺跡南側のA区とB区にみられる。A区SI-3（一辺3.5m）とSI-4（一辺3.9m）、B区SI-1で、カマドは北壁に造られていた。本遺跡や関道遺跡など台地内部の遺跡はおのずと水源に限られ低地も狭小であるためか大規模な水田開発には適しておらず遺構密度も低いと考えられる。逆に広い低地と水源に支えられた地域（田川右岸）に位置する大房林遺跡や城南3丁目遺跡などは、該期の遺構の密度が高く、律令期に計画的に集落が作られたと考えられる。

中世には、宇都宮氏の家臣江曾島政綱が城主と伝えられる江曾島城が本遺跡の北西に位置する。おしめ尽遺跡では、この時期の遺構としてA区に南北に延びる溝跡がある。葎土より12世紀後半代の舶載青磁と15～16世紀の拓器・陶器小片が出土した。この溝の延びる北西には江曾島城が所在し、何等かの関連が推察される。

近世の遺構は確認されていないが、A区やC区の耕作痕（攪乱）は東西・南北に延び、畑地として頻繁に耕作されたと考えられ、一部攪乱内には近世以降の陶磁器の破片が含まれていた。

第2節 遺構・遺物について

SI-1は北側の3分の1が調査区外で、堅穴建物跡の全体を調査できなかったが、一辺が5.2m程の方形と推察される。4本の支柱穴を確認し、柱穴は径25～40cm、深さ72～78cmと離りしたものであった。貯蔵穴は2基確認され、P-1が60×55cm、深さ40cm、P-6が85×70cm、深さ25cmである。

カマドは東壁を15cm程掘りくぼめたもので、初期カマドの形態である。床は支柱穴の外側を粗掘り後中央部を除いて貼床されていた。南壁際には三日月状の周堤帯が設けられ、その内側に貯蔵穴西側に接して台形状に灰白色粘土がみられた。この粘土は出入り口に関係する施設と考えられ、権現山北遺跡の2号住居址に類例がみられる。

床面における周堤帯は、第3表に示したような遺跡の堅穴建物跡で確認されている。この周堤帯の特徴として南壁際で中期に多い傾向がみられた。

遺物は前述の如く小片からほぼ完形に近い土師器の坏や壺などが多くみられた。立野遺跡編年（内山2005）の3・4段階と考えられ、5世紀後葉の時期と考えられる。

第3表 周堤帯を持つ堅穴建物跡

遺跡名	遺構番号	形態	場所	時期	備考
稲荷塚	第6号住居跡	馬蹄形	南壁際	古墳中期	内側に白色粘土あり
稲荷塚	第8号住居跡	馬蹄形	南壁際	古墳中期	南壁張り出しあり
権現山北	2号住居址	三日月	南壁際	古墳中期	内側にビットあり
権現山北	12号住居址	馬蹄形	南壁際	古墳後期	内側にビットと張り出しあり



A. 調査区全景（西から）



B. 調査前全景（東から）



C. 遺構確認状況（東から）



D. SI-1 土層 A-A'（南から）



E. SI-1 土層 B-B'（東から）

図版 2



A. SI-1 遺物出土状況 (西から)



B. SI-1 遺物 5・18 (南から)



C. SI-1 カマド土層 F-F' (西から)



D. SI-1 カマド完掘 (西から)



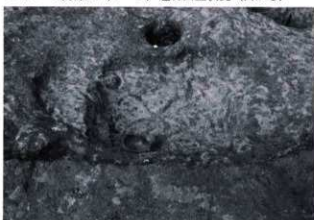
E. SI-1 貯蔵穴 (P-1) 土層 (南から)



F. SI-1 貯蔵穴 (P-1) 遺物出土状況 (西から)



G. SI-1 貯蔵穴 (P-6) 土層 (西から)



H. SI-1 貯蔵穴 (P-6) 遺物出土状況 (南から)



A. SI-1 南壁灰白色粘土 (北から)



B. SI-1 完掘 (西から)



C. SI-1 細方完掘 (西から)



D. SK-1 土層 (南から)



E. SK-1 完掘 (南から)



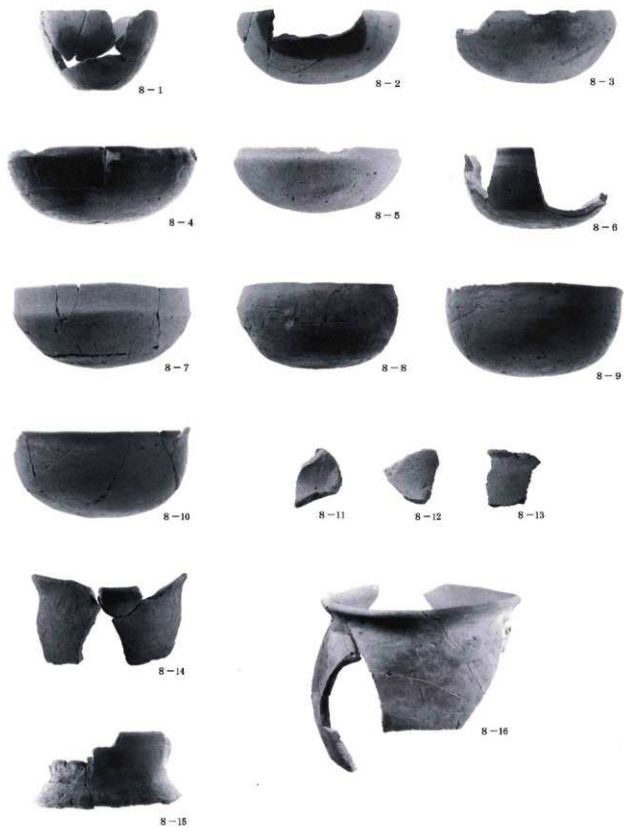
F. SK-2 土層 (南から)



G. SK-2 完掘 (南から)



H. 基本土層 (東から)



SI-1 出土遺物 (1)



SI-1 出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	おしめじんいせき しいく							
書名	おしめ尽遺跡 (C区)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第109集							
編著者名	近藤 真・新井 潔							
編集機関	株式会社日本竊業史研究所							
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112 TEL 0287-93-0711							
発行機関	宇都宮市教育委員会							
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5 TEL 028-632-2764							
発行年月日	西暦2021(令和3)年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おしめ尽遺跡 (C区)	宇都宮市江曾高4丁目 122地内	9201	3227	36° 21'	139° 52' 07"	20201005 5 20201017	72	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
おしめ尽遺跡 (C区)	集落跡	古墳時代	・竪穴建物跡 1軒	・土師器		・5世紀後葉の初期のカマドをもつ竪穴建物跡。		
要約	・5世紀後葉の竪穴建物跡で、東壁にカマドを築き、南壁際に周堀帯を伴う貯蔵穴が設けられていた。							

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第109集

おしめ尽遺跡(C区)

発行年月日 2021(令和3)年8月31日
 編集 株式会社日本竊業史研究所
 〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112
 TEL 0287-93-0711

発行 宇都宮市教育委員会
 〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5
 TEL 028-632-2764

印刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
 〒321-0904 栃木県宇都宮市陽東5-9-21
 TEL 028-662-2511